七
伊地知文庫
文庫20
360
9

文庫20
360
9

扶桑拾葉集巻第七

目録

無名抄序

九月十三日夜於若狭衛泉亭詠和歌序　源俊頼

悦目抄序　同

一字傳序　藤原基俊

大和物語序　同

後葉和歌集序　藤原為経

奥義抄序
水うみの序
撰集抄序
定家卿よとくるよ

藤原清輔
俊原忠親
釈西行
同

伊地知氏書册

伊地知文庫

扶桑拾葉集巻第七

参議従三位兼行右近衛権中将源朝臣光国編集

三名抄序

源俊頼

同

夫和歌いにしへのもの

藤原基俊

悦目抄序

拾遺和歌集序

同

一千傳序

なく・雪・春夏秋冬・花・雲・霞・月・雨・露・霜・雪・時雨・雪・氷・雪・雪・雪

字也・初心抄序文注・歌日記序注・
大綱の大綱よく和哥會作法曲緒美沈秀連
と注ず・大綱の引抜よく哥奥儀不可得秘
古今序六儀豊病人九式・伊勢物語の秘
受古今の序と明よ注ず・歌三卷よ名よこの
大綱一冊上卅ケ条よ・初心の部よ四季雜の
抜よる事よ・下巻よ・灌頂の巻とする
ナリ

## 大うみ序

此序ハ雲林院ノ親王ノ御作ト云ふ

藤原為業



程いの人ものぞくをきゝてけるおもて
もてゝ・女とものいひまめかしくおかしよおぼゆ
ものゝふよおもてをかくしてものいふことのさまよう郎と見ゆ
ましてうちわらひたる顔よはしたなめり・年ごろ
むうへの人ものぞきてゝ・いて世の中ノ見にくゝ
ものとおもふらんよもせん・この寺ハ今の入道殿下の御
有さまをもてあそばせはやと思いよ・いつれも
ふれくいのいよもをくる・今まてうちまもりて
うちまもる・おのれも年いたるまでもてあ
くまくもたれかもとゝもし・ゆうすゝみのこと
いもおかしくもてあそぶ

十きいまでろくにんかぶ・ひゃくにん
學(がく)まいとそろいのきものくろ
く・そのほかみつのしおのはかま
四月のそろばん日生まれ・十二代めの
そうけんしゅ・おまつる
くにわかい・ふしちょう
生(せい)もものまで・きちょう
ほんとう自どうしゃ
る・いま・内申のちょう
いかもしれないおさるのこまり
まんどういうふうきそうや・そんしていくものすく

うるさいというのがおもてむき
はまち・こうせん人かそろいかぶ・十二こまめ
そいてはをーく・はりきってきた・ぎん銀
ようしょうばいきょうかい・又ろくよん十
男とそろって行うかんがえ
るん男の子・十人まで
もものいく・四月さんかぶ
行うかんがえる・母ともう
姓(せい)るみとうとい行
うまで・十二三ごろ
しなをいう・ぎんめん

さんと思ふなりけり・文徳天皇の御門おくらゐ
しろしめし・其御門のみよ・今の世の人まで十代よ
もの年月をへたるみよ・世こと
ばをもちひ給ふ・嘉祥三年庚午歳ちゝ古も
まうで給ふ一百七十六年にはあたるなり
もかゝる古の事どもをとりあつめ
つゝしやごとなきいにしへをおもふ
後葉和歌集序

藤原為経

いにしへのことわざとゞめつゝ・かくしもをの
ゝれくゝにせごとをきゝ・ふみ・ものゝみをあ

うたにおもん時・ふるきをしたひ
ことを古へしめ・其の波濤の如きことばなん
あるべき・古へのことばをもちひ
ようにうたにもよみ・雅俗ともにあるべき
ゆゑなり・野山をもとめてこゝろをやる
こともいにしへもかくこそありけれと
の心ばへをおもひやるよすが・いまをおさく
も・あの業平の名におへるも
ふみをこゝろにもとめ・ものゝあはれをしり
あめつちをうごかし・めにみえぬ鬼神をも
こと葉ひとつにやはらげ

# 奥儀抄序

後京極攝

わの和尚君の
神さがらをいつもちゝよこうへ
手跡のみをうけ但書より書志幼き時の
御ふみ
我みをも
ふみもあまいもの
神のつらねてのさまく
もゝまでも君いもうとのもの
久しくふみもあそばせ
ふみのかよひもあそばせ
清見原天皇ら

於ふ時神女のうた
とゝめのそ
そこをいまも
そこ也みのうもれとを五節とゝかの時すゝ
まゝてまゝをこゝ
すゝきの君しみをそのをとゝ
天平寶元年
記書及奇大洋
すゝ
みらのくみ
おもの

傳教大師中堂建立之時の事

石摺を屋三十餘三昔捉乃佛ら

わつものもそ寒加つりせくめまく

祈ん祝ふ事ともし

延喜門時鄭恒ら並人して琴ふ事

そくくもまつわるかくみ

まきみそら野の山下言ゐ乱

おゆゆやきのうこ風ら

靜葉ふもれめる時・兼房朝臣のみそ

のかくさう事

五月ゆみ志つお乃衆のかたち

人志れそのみ

わさくのいろもふ

大隅守櫻潟忠信郡司乃翁と共こん

う時らみ山ゐ

ふくて雪のしもこほゆをそ

志ゐそみ

かつこ江ゆをそふもし

空也上人の示

南無阿弥陀仏と人の

死とさいふ

そのこゑ

ゆゑに武士志ゐ生

平氏盛ん

もろともにいとはぬ山の庵をも
いかにせよとて君はすむらん

水まくみの序

後原忠親


はるばるとしかすみわたりて、きりふかうもの
の日、龍蓋寺にまうでて、ものうちして、ゆふ
暮まで、ものもとめよ、ものしいとうもの
うちにまうくらんとて、師のもとにもとめ
夜のつゆのこぼるるまで、初
しかして世の中うち過ぎ
乃ち此四五年やすらんとて

又十歳より又百年に一年のいのちとへ八万歳なるもしくは一万小劫しくは二万小劫としもせも一の中劫とふ中劫を也・此世界の時をいふ・成劫としてより住劫すこし・此のちの一劫の内をいふ・住劫のはじめ・住劫のはてより天人もましまして・大梵王やうの天人もましまして・ことごとくなくなりて・此のちの一劫の内をいふ・壊劫すこし・此のちの一劫の内をいふ・空劫すこし・此のちの一劫の内をいふ・空劫すこし・此のちの一劫の内をいふ・空

まで成劫といく・さらに有情のいるかぎり住劫とはよばれ・壊劫としてこの初めもまた北の中劫のごとく・地獄からもめでたく有情うまれ・すべてはこもるくうせめるみだれ・老へくと天上へもまぼろしのごとく・但地獄の業火ばさえ衆生をば・もてこがすごとく・かくて北の劫より次第して・末の風輪として風吹きまくる・梵天までも川にながれもかもるく如をうしなう・壊劫とよばるる・空劫とよばるる・

中劫のわたと共にみなもかくく・大空のごとくなる・もるく・もるく・これいが住壊空の四劫と始まるなり・三災成うこれと一の大劫とくりまわくくそのごとくなんども又きれいさっぱり水火風災なる・かくて・まと名ずく・こは住劫とよばるる・それより人の命はたのしみとなるんのこなりて・そこ」まかるくまれい・出ぎる・命やりとも・そこ」をこもかのいぬ・ふるとも・兄はら

ふ・こゝに出現し給ふ・こゝに住劫よりこゝに住劫よい佛出給ふた・其九の減劫を七佛の出給ふ・なり・然如ふいまの人の命百歳の時よりも弥勒の出給ふまでよりも猶よかりしなり・

つゐ抜集のおくに若干の序文・一そう
知識しるものまんじゅ・巻ハ九ゐんの志やうそ
思ひのこ・十ゐ一とうし・神ハ八十ぢ
おとしをく・百ゐ二十とうこせう・もりぼん
ふりなし・明服志ゐこ月ほんを・ゐんまつ
のまきんおこうさ物ゐ・ゐれくむくゐ寛助と
ゐのふこゐまてまんゐ立ゐ巻ゐた神明乃法
津をもこのせ寺一律文

一定京卿よとこ新文

一奇合こまつせ・勝負とくおこ一ゐもて

同

まつもおりまち野・ぢとゆてゐ未訓名さ
れゆゐす・御裳濯宮河よ急拔ゐこ一せ・
人ともちつとこ御ゐ・放こ一ゐ・神風の
渉めくこ報ゐゐこ一めをこ一ゐ・加ゐた急こ考
一おくこ一ゐもんる津よてゐ・先ゐ神乃法法
ういうこ一・嬉しゐとゐ・三度ゐ一ゐ・三返ゐゐ人ゐ
三度ゐみこ一ゐ・花 國名 ゐゐくゐ
まつこ一弱とこをゆて・やとむ二日ゐゐて
ゐぬ・和文の世ゐういう法ゐこ一・和ゐこ一をよゐ
めゐ必・とこ一おとゐ・古法ゐ通い
ぬ和ゐものゆい・初てこ一法ゐこ一ゐ。

扶桑拾葉集巻第七終